

琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

瀬戸内の道

76

2012 November

特集



瀬戸内の道

陣内 秀信

- 3 地中海と瀬戸内海を結ぶ「道」 法政大学デザイン工学部教授 陣内 秀信
- 6 厳島神社と平清盛 広島大学大学院教授 三浦 正幸
- 8 朝鮮通信使と瀬戸内海
- 10 瀬戸内海の海運と変遷
- 12 瀬戸内海の変容と再生 広島大学大学院教授 戸田 常一
- 14 島を結ぶ瀬戸内しまなみ海道 広島県愛媛県

■「碧い風」75号に関するお詫びと訂正

「碧い風」75号に誤りがありました。お詫びするとともに、次のとおり訂正いたします。

- 12ページリード文1行目
[訂正前] 広島県北西部→[訂正後] 広島県北東部
- 21ページ本文4段9行目及び写真キャプション
[訂正前] 山形県船形町→[訂正後] 山形県舟形町
- 25ページ本文1段末尾から9行目
[訂正前] 琴浦町→[訂正後] 北栄町

*本誌は再生紙を使用しています。

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

76

2012 November

contents

- 15 「若者たちの地域づくり」11 地域の母親との交流を大切に、学生たちが子育ての現場で奮闘 (山口県下関市)
- 16 「地域に生きる企業家群像」76 株式会社清水 社長 清水 昭允 (鳥取市)
- 20 「企業連携レポート」8 低品位のスクラップから高品位・高付加価値の鋳造品を生産 (広島市)
- 22 「キラリ、輝く元気企業」49 ステンレスの研磨技術でステンレスの可能性を広げる太華工業 (山口県周南市)
- 24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」72 現代文明への問いかけを込めてチエンバロを製作する難波 修さん (岡山県総社市)
- 27 「ご当地B級グルメ」8 いただき (鳥取県弓浜半島)
- 28 「藩ものがたり」11 松江藩 (鳥根県)
- 30 「ローカル線探訪」5 若桜鉄道若桜線 (鳥取県八頭町・若桜町)
- 32 「国宝の旅」11 赤韋威鎧 (岡山市)



特集

瀬戸内の道

地中海と

瀬戸内海を結ぶ「道」

陣内 秀信

地中海と瀬戸内海には歴史の中で形成された個性的な都市空間や風景が数多くあり、それらは人々の生活の場として生き続けている。こうした魅力を生かした地中海と瀬戸内海の交流は、私たちに新しい可能性をもたらしてくれる。

類似している

瀬戸内海と地中海

瀬戸内海は、規模こそかなり小さいとはいえ、地中海とさまざまな点でよく似ている。

まず、東西に細長いプロポーションや地形が類似している。両方とも、海岸線は変化に富み、その背後には急峻な丘や山が広がっている。海に開く斜面地には街並みが広がり、入り江を利用して数多くの良港が造られている。多様な

空間と景観、そして濃密な都市構造は両者の共通点である。

歴史の古さという点でも瀬戸内海と地中海には大きな共通性がある。地中海では、エジプトの古代文明やエーゲ文明に始まり、フェニキア、ギリシャ、ローマ、イスラームのアラブ、トルコとさまざまな民族が登場し、敵対と交流を繰り返してきた。まさに、海は敵対し隔てるものであると同時に、交流の場でもあり、多くのモノと人と情報が行き交った。文化の伝播が行われたのもほとんどが海を



世界に誇る瀬戸内海の多島美 写真撮影: 脇山 功

介してだった。

それは瀬戸内海も同じである。古来、中国や朝鮮半島との交流が海を介して行われ、船が通るルートである瀬戸内海で遣隋使や遣唐使の船が港町に寄港した。中世にも活発な交流が行われていたことは、瀬戸内海の芦田川の港町として栄えた草戸千軒町（広島県福山市）や尾道、鞆（広島県福山市）などの出土品からも裏付けられている。近世には朝鮮通信使がこの海を通り、いくつもの港町に大歓迎されて宿泊した。

また、多くの島に生まれ、海賊がいたことも共通しているし、魚が豊富で、欧州では珍しくタコを食するという食文化も共通している。

輝きに満ちた海洋都市・アマルフィ

このように類似点が多い地中海と瀬戸内海であるが、都市という観点からも、地中海の港町の中には瀬戸内海の港町とよく似た都市が見いだせる。

古代を起源とする地中海の港町に共通しているのは、港を持ちながらも城壁に囲まれ、少し奥の高台に聖域を設け、その周辺に居住地が広がっている点だ。そうした海洋都市の中でも特に瀬戸内海の港町とよく似ているのが、ナポリの南に位置するアマルフィである。

太陽にあふれ、いかにも南イタリアらしい輝きに満ちたアマルフィは、世界遺



高台に寺院や神社が建造されている尾道市 写真提供:一般社団法人尾道観光協会

アマルフィと似ている瀬戸内海の尾道

彷徨いこんだような錯覚に陥る。心地よい木陰を生み出すトロピカルな植物群やイスラム建築独特の手法はヤシの生い茂るオアシスの雰囲気を生み出しており、それはまさにアラブ人が求めた「地上の楽園」のイメージである。

このようにアマルフィにはイスラム世界の色彩が色濃く残っているが、そこにはアマルフィの文化の源流はイスラム世界、アラブ世界であるというアマルフィの人々のアイデンティティがある。だからこそ、一九世紀に行われた聖堂の修復では、それまでのバロック様式ではなくイスラム様式を採用し、アラブ風の外観を理想化して造形している。

早い段階から東の国々や民族と繋がっていたことを自分たちの誇りとしたのである。そこが北イタリアの海洋都市であるヴェネツィアとの大きな違いである。

瀬戸内海の港町も、アマルフィと似た都市構造を持っている。地中海の都市のような城壁はないものの、古い時代から人々は奥まった高台に住み、中世には都市の原型が構築された。近世になると、大がかりな土木工事によって埋立地が造成され、そこに堂々たる港の施設と街並み

が形成された。たとえば鞆では、入り江の奥の港周辺には雁木や常夜灯、波止、たて場など、近世の貴重な遺産が受け継がれ、港町の風景を特徴づけている。

とりわけアマルフィと似ているのが尾道だ。尾道では海を見下ろす高台にいくつもの寺院や神社が建造され、中世では山側から海に伸びる何本もの道が重要

産にも登録された海岸線をはじめとした美しい風景と豊かな歴史に恵まれ、過去の栄光と美しい風景を求めて、今でも世界中から多くの観光客が訪れている。数年前に日本映画のロケ地となったこともあり、日本からの観光客も急増している。

アマルフィは、ピサ、ジェノヴァ、ヴェネツィアといった北イタリアの名高い海洋都市よりも早く、地中海を舞台にオリエント、北アフリカのイスラム世界との交易を開始し、一〇〇一世紀には共和制の下で繁栄を極めた。アマルフィの人たちは中世の早い時期に羅針盤を使った航海術を発達させ、航海に関する法典も作成している。まさに、海に開き、海とともに生きる海洋都市である。

アイデンティティを大切にしたいアマルフィ

アマルフィを歩くと、華やかな歴史が町の至る所で感じられる。

アマルフィは、背後の険しい渓谷の限られた土地に、その斜面を有効に生かしながら、都市空間を高密に築き上げている。東西両側の山の中腹へ向かう斜面に、奥へ奥へと重なるように住宅地が展開する風景は迫力満点である。その風景を目にすると、中世初期のアマルフィの人々が、目の前に広がる地中海の先

な役割を担っていた。近世になると、海岸線と平行に街道筋が走り、立派な街並みが形成された。尾道の街並み、とりわけ高台に向かう斜面を登っているように、アマルフィの町を歩いているような錯覚を覚えるほどだ。

可能性に満ちた地中海と瀬戸内海の交流

このようにさまざまな点で類似している地中海と瀬戸内海であるが、その類似性を大切にしながらか交流を深めていこうという動きも活発化している。昨年十二月のクリスマスには、私も関わったアマルフィに関する調査報告書の出版を記念してアマルフィでイベントが開催され、日本から約三十名が参加した。そこには尾道市の向島で染物をしている立花テキスタイル研究所のメンバーも参加し、



地中海に開かれたアマルフィの街並み 写真提供:フォト・オリジナル

ある広い世界に新たな可能性を感じ、冒険心を奮い立たせて船出した気持ちも理解できる。

港に開く「海の門」から入ると、華やかな聖堂の広場に出る。海に生きる人々が、朝に夕に必ず通った精神的な中心広場だ。その正面奥にそびえる聖堂はアラブ独特のアーチを工芸的に織り上げた美しいファサード（正面の外観）を見せる。

聖堂から奥には賑やかな商店街が伸び、アラブの市場のような様相を見せる。その背後には、アマルフィらしい階段状の坂道が幾筋も伸び、勾配のきつい斜面の上に独特の住宅地が広がっている。

圧巻は、聖堂の左手奥に潜んでいる「天国の回廊」である。もともとはアマルフィの有力家族の墓地として造られたもので、太陽のまぶしい華やかな港町の表側とは打って変わった静かな落ち着いた雰囲気を持つ。ここに入ると、アラブ世界の国に

アマルフィのレモンの葉を使った染物を実演し、大きな反響を得た。

さらに今年の六月には、アマルフィで開催された四大海洋都市レガッタ大会に関連して、瀬戸内海の中世にスポットを当てた国際シンポジウムが開催され、広島からも学者や研究者などが参加して、地中海と瀬戸内海の比較を議論し合った。

現時点では、学術的なアプローチが中心となっているが、今後はアマルフィの市民も招待し、市民レベルでの交流へと発展させていきたいと願っている。そのためにも、瀬戸内海の港町を点ではなく、線として繋げていくことが必要である。岡山県瀬戸内市の牛窓や、鞆、尾道など、瀬戸内海には個性的な港町がたくさん存在し、独自のまちづくりを展開している。そうした港町を繋げていけば、瀬戸内海はもっと魅力的になるし、そこから新しい可能性が生まれてくるであろう。



地中海と瀬戸内海の魅力を語る陣内教授 写真撮影:阿部 章仁(岡山市出身)



福山市の鞆の浦に浮かぶ仙酔島(中央) 写真提供:公益社団法人福山市観光協会

profile

陣内 秀信(じんないひでのぶ)

1947年福岡県生まれ。東京大学大学院工学系博士課程修了。法政大学デザイン工学部教授、工学博士。専門はイタリア建築、都市史。主な著書に、『都市を読む・イタリア』『南イタリアへ』『地中海世界の都市と住居』『興亡の世界史・イタリア海洋都市の精神』などがある。

厳島神社と平清盛

三浦正幸

瀬戸内海に浮かぶ厳島神社は、日本一の規模と秀麗さを誇り、日本の歴史上初めての海上社殿で知られる。そこには、厳島神社の瀬戸内海における価値を見だし、造営した平清盛の崇高な思いが込められている。



厳島神社がある宮島(中央の島)と本土の間の海路は海上交通の要衝となっていた。写真撮影:脇山 功

海に浮かぶ、日本一巨大で壮麗な神社

厳島神社の創建は古く、推古天皇癸丑(五九三)年と伝わり、社殿の創建は飛鳥時代末から奈良時代にかけての七〜八世紀と考えられている。現在のよな海上社殿は、平安時代末期の仁安元(一一六六)年頃までに平清盛によって修造されたと考えられる。

清盛の造営した社殿は、それまでの社殿形式を一変させるもので、寝殿造りの豪華な宮へと変貌を遂げた。何より、陸地を掘削して人工の海を造り、日本で唯一の海上社殿を造った清盛の発想力の崇高さには驚くしかない。

社殿は厳島の北岸にある入り江の中に建てられている。そのほぼ中央に本殿、幣殿、拝殿、祓殿という四棟からなる本社があり、本社に向かって左に客神社が建ち、これも四棟からなる。この二つの社と陸地が長い回廊で結ばれ、社殿の前庭のかわりに平舞台という板敷き広がる。

本殿、拝殿、祓殿、回廊は神社史上最大の規模である。神社全体を見ても日本一の規模を誇り、春日大社の十倍あり、伊勢神宮、上賀茂・下鴨神社、八坂神社、出雲大社のいずれをも凌駕する巨大さには圧倒される。

厳島神社の修造がなつて間もない仁安二(一一六七)年に、清盛は太政大臣に就任し、天下人となった。これを厳島の神のご利益のおかげとして、直ちにお礼の参拝を行っている。

海上交通の要衝としての厳島神社

厳島神社のもう一つの存在意義は、厳島神社前の海路が瀬戸内海航路の要衝であったことである。瀬戸内海を往復するすべての船は神社前の狭い海路を通らなければならなかった。当時の船は嵐に弱かったため、厳島の南側の大海原を

また、本殿を除き他の主要社殿は平安時代の貴族の邸宅である華麗な寝殿造で、拝殿に向かって右側に川が流れ、正面の池ならぬ海に注ぐという配置も寝殿造のものである。ではなぜ、清盛はこのように前例のない日本一巨大で秀麗な社殿の造営を目論んで、厳島神社を造り替えたのか。厳島神社は清盛にとつてどのような存在であったのだろうか。

厳島の神を篤く信仰した清盛

これには二つある。まず、信仰の対象としての神社である。

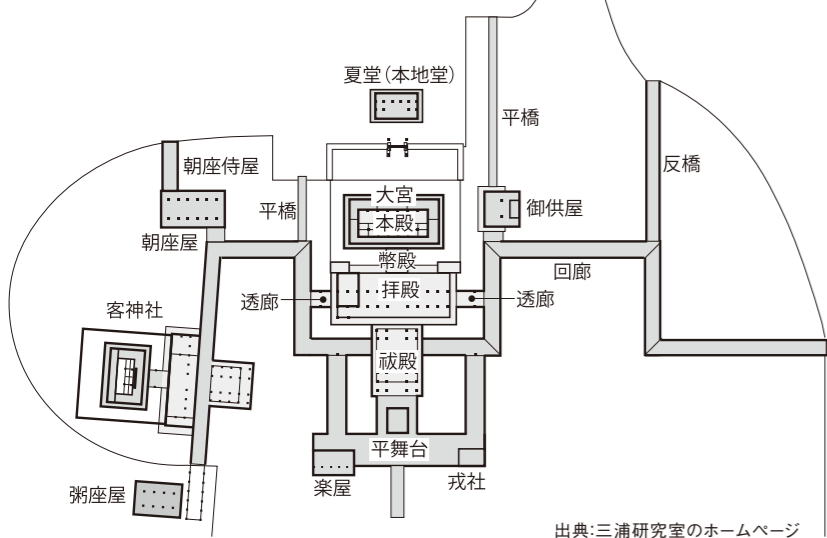
清盛は厳島の神を本心から篤く信仰した。清盛と厳島との関係は、出世街道を歩む清盛が安芸守に任じられた久安二(一一四六)年に遡る。国司として一番の任務は安芸一宮である厳島神社の維持管理であった。そのため赴任すると直ちに参拝し、密接な関係を築いてきた。一宮はその国の政治的、精神的支柱であったから、一宮を抑えておけば国中をうまく治められた。厳島神社と清盛が親密な関係になるのは当然であった。

さらに、清盛は厳島神社を平氏の氏神社として祀った。当初、平氏には特定の氏神社がなかったが、他の氏族や天皇家は有力な大社を氏神社としていたので通ると嵐に遭ったとき遭難する恐れがあった。そこでなるべく陸地に近い安全な海路をとった。それが厳島の北側、厳島神社前の海路であった。今で言えば、世界の船が通航するシンガポール沖のマラッカ海峡のような重要な海路だったのである。

日宋貿易を推進した清盛にとって、この神社前の海路は極めて重要であった。日宋貿易だけでなく、当時、九州の年貢米を京都に運ぶ船も瀬戸内海を通航したので、厳島を抑えれば、京都を兵糧攻めにもできた。

広島から西の地方の経済・文化と京都の経済・文化は、瀬戸内海を通して伝えられ、その際、必ず厳島神社前の海が重要な大動脈となったのである。このように、平家一門の栄耀栄華の祈りのため、瀬戸内海航路掌握のため、清盛にとって厳島神社は極めて重要な拠り所であったのである。

鎌倉時代における厳島神社社殿配置図(仁治度) 図面の復元:山口 佳巳



出典:三浦研究室のホームページ

ステータスとして必要だった。しかし、近畿地方の有力大社を氏神社にするわけにはいかず、近畿から離れたところにある、清盛が信頼関係を築いている社

となると、厳島神社の他になかったのである。また清盛は、厳島の神を篤く信仰していた。清盛が生きた平安時代末期は、浄土教が広まり末法思想が盛んで、永承七(一一〇五)年

は「末法第一年」とされて恐れられた。極楽往生するには善行を積み重ねなければならず、そのため貴族たちは争うように華麗で巨大な寺を次々に造った。

清盛は極楽往生ではなく、現世でのご利益を厳島の神に祈った。平家一門の栄耀栄華と自身の天下人への立身出世を願った。そのためには厳島神社を日本一巨大にし、最先端デザインの秀麗な神社にしなければならなかったのである。



夜明けを迎える瀬戸内海の島々 写真提供:広島県三原市

profile

三浦正幸(みうらまさゆき) 1954年愛知県生まれ。東京大学工学部卒業。広島大学大学院教授、工学博士。専門は日本建築史、文化財学。主な著書に、『城の鑑賞基礎知識』『城のつくり方図典』『平清盛と宮島』などがある。

朝鮮通信使と瀬戸内海

室町時代に始まる朝鮮通信使は、日本と朝鮮半島を繋ぐ文化交流使節として大きな役割を果たしてきた。その交流の舞台の一つが瀬戸内海であり、各寄港地にはかつての交流の足跡が残っている。

瀬戸内海を舞台に交流した朝鮮通信使

瀬戸内海は古来、日本と朝鮮半島、中国大陸を繋ぐ海の道として大きな役割を果たしてきた。その中で歴史的に重要な交流が朝鮮通信使である。通信とは信を通わすことで、通信使は外交使節として相互に国書を交換し、友好関係を保つために派遣された。

朝鮮通信使といえば華やかな行列に代表される江戸時代の往来が有名だが、それ以前にも名称は異なるが使節の来訪は行われていた。室町時代には、当初は朝鮮半島沿岸を襲う倭寇（海賊集団）の取締り要請が主目的であったが、後に足利將軍家の慶弔などの友好目的に変化していく。朝鮮出兵を行った豊臣秀吉の時代にも、出兵の前後に日本国情探索の目的で二度の通信使が派遣さ



「対潮楼」の額が掲げられた福善寺 写真提供:福山市観光協会

宮)を宿所とし、通信使の来日の度に寺を修築した。滞在した三使などは、壇ノ浦で入水した安徳天皇を偲ぶ漢詩を詠むことが慣例であった。これらは明治の廃仏毀釈により大部分が失われたが、第八回に來日した副使の詩書が残っている。

長州藩・上関(山口県上関町)では、三使のための御茶屋(宿所)を海を望む高台に建てて歓待した。御茶屋自体は現存しないが、当時の門が超専寺に移築されている。また、超専寺は通信使が上関に寄港する様子を描いた「朝鮮通信使上関來航図」を所蔵する。

広島藩・蒲刈(広島県呉市)では、

通信使一行が宿泊する御茶屋を都度新築するとともに、「安芸蒲刈御馳走一番」といわれる豪華な饗応料理でもてなした。松濤園内の資料館には、料理の復元模型や当時の様子がかがわれる衣装、書画、通信使船の十分の一模型などを展示する。また、通信使が上陸した雁木(石段づくりの棧橋)も残っている。

福山藩・鞆の浦(広島県福山市)では、三使の宿所であった福禅寺が鞆の浦の絶景を眺望するには絶好の場所にある。三使らはこの眺めを「日東第一形勝」対馬から江戸までの間で最も美麗」と絶賛し、また、客殿を「対潮楼」と命名

れている。

徳川幕府成立後、家康は秀吉の出兵により断絶していた朝鮮王朝との国交回復に取り組み。幕府は早期に朝鮮との国交を回復し、朝鮮経由での明との通商関係再開を目指した。この時、徳川幕府の代理として朝鮮王朝との仲介に奔走したのが、以前から朝鮮との関係が深く、現在の釜山に居留地を有し、貿易を許可されていた対馬藩である。

対馬は耕作地が少ないため、朝鮮への出兵や貿易途絶などにより甚大な打撃を被っていた。このため、国交回復のための国書交換(通信使派遣)を朝鮮王朝に働きかけ、その実現のため、侵略に対する家康の謝罪国書の偽造なども行った(三代・家光の時代に発覚し、以降は幕府主導の外交となる)。朝鮮側も秀吉に連れ去られた人民の送還が急がれており、また、大陸北方で満州族が台頭し明や朝鮮国境を脅かしていたこともあり、南方(日本)の安定が必要であった。こうして、慶長十二(一六〇七)年、二代將軍秀忠の時に江戸時代初めての使節が来日し、国交回復が行われ、以後、文化八(一八一)年までの約二百年の間に十二回の来日があった。

朝鮮通信使は、国書交換の総責任者である正使、その補佐役の副使、記録などを行う従事官の三使のほか、一流し書に記した。これらの書は藩により、木の額に仕立てられ、福禅寺に掲げられている。

岡山藩・牛窓(岡山県瀬戸内市)には、疫神社の秋の祭礼で催される「唐子踊」が伝わっている。色鮮やかな朝鮮風の衣装をまとった二人の男児が踊るもので、三使の従者として付き添っていた小童(日本の小姓に相当)による舞いを伝承した踊りといわれている。

現代に再現される朝鮮通信使行列

現在、通信使ゆかりの各地では、さまざまなイベントに合わせて通信使の行列再現が行われている。地元市民のみならず、韓国からの市民や学生も参加して通信使の衣装をまとうて行進する。

下関市での行列再現は、八月に開催される「馬関祭り」での恒例行事となっており、今年で九回目となった。両国市民約二百人が行進し、ゴール地点では国書交換セレモニーが行われた。

蒲刈(下蒲刈町)でも文化と歴史の祭典として、韓国からの高校生(二十名程度)を含む約二百五十人が参加する再現行列を十月に開催し、今年で十回目を迎える。ゴール地点での国書交換式や舞踏等のイベントも行われる。

この他にも、各地で時期や規模は異

の文章家・漢詩家・書家・画家・医師・音楽家・馬術家などで構成される文化使節団でもあった。江戸時代後半の来日では、民間人も含めた文化交流が各地で繰り広げられることになる。総員では四百〜五百名が六隻の船団で来日し、日本国内に入ると、対馬藩や関係各藩の護衛などに先導され、赤間関、上関、蒲刈、鞆の浦、牛窓、室津、兵庫に停泊の後、大坂に入る。通信使船を大坂に滞留させ、操船関係者(約百名)を除いて、一行は陸路を江戸に向かった。この行列を見物することが、当時の庶民の大きな楽しみであったといふ。

朝鮮通信使の足跡が残る瀬戸内海

瀬戸内海において通信使の船が寄港した港は、古代から風待ち、潮待ちの港として、また、近世の北前船などの寄港地として重要な海上交通の要衝として栄えていた。

徳川幕府は、その威信を国内外にアピールできる朝鮮通信使を国賓級の扱いでもてなした。このため停泊地の各藩では、食事や宿泊施設の用意、道の整備、移動手段の確保、警固などに膨大な費用と人員を要した。

長州藩・赤間関(山口県下関市)では、三使や上官たちは阿弥陀寺(現赤間神社)で待たされた。この寺は、三使の来日の際に、通信使の出入り口として、また、通信使の船が寄港する際に、日韓双方の関係者・団体がパレードや各種イベントに多数参加している。

なお、歴史的事実に即すれば、中国地域では通信使は船による寄港地間の移動であったため、通信使行列は行われていなかった。しかし、再現行列を行うことにより、江戸時代の友好のシンボルとしての朝鮮通信使を具体的なイメージとして理解し、地域に情報発信することは有効である。今後とも多くの市民の参加により、両国の文化交流の基礎となることを期待したい。

文・小早川隆(中国電力㈱エネルギー総合研究所、広島大学マネジメント研究センタープロジェクト・朝鮮通信使研究会)



下関市の馬関まつりで再現される朝鮮通信使 写真提供:下関市

瀬戸内海の 海運と変遷

古くから海の交流の舞台として栄えてきた瀬戸内海は、江戸時代に全国的な海運網が整備されると、重要性をますます高めていった。それとともに、瀬戸内の港町にも大きな変化をもたらしていった。



瀬戸内海の島を縫うように航行する船 写真提供:広島県呉市

高く評価された。中世以来の伝統に培われた優れた航海技術を持ち、堅牢な弁財船を所有し、幕府の直雇船であったからである。

西廻り航路の城米の輸送でこの塩飽廻船の海運力は大いに発揮され、一七世紀後半から一八世紀にかけて最盛期にあった。当時、塩飽廻船は二百隻もあり、船員は三千人以上いたという。しかし、一八世紀中ごろから幕府が江戸の廻船問屋に城米の輸送を請け負わせるようになる、塩飽廻船の繁栄にも陰りが見え始めた。

この頃、頻繁に瀬戸内海に登場する

西廻り航路と弁財船

江戸時代になると、商品経済の発達に対応して全国的な流通経済網が構築されるようになった。なかでも、物資の大量輸送に優れた海運は大きく発達し、国内沿岸の港と港を結ぶ全国的な海運網を実現して、物資の流通と商品生産を活発に展開するようになった。

近世海運の発達を支えたのは幕藩領主の年貢米の廻送で、領内の農民に課した年貢米を江戸、大坂、京都の三大都市で換金し、そこで取得した貨幣を全国の都市で消費するため全国的な海の流通網が発達した。それが確立されたのが、寛文十一（一六七二）年及び翌十二年の河村瑞賢による東廻り航路、西廻り航路の開拓である。瑞賢は江戸時代初期の豪商で、幕府の年貢米廻送の一大事業と、江戸を中心とする全国的な運輸体系を確立した。

瑞賢はまず寛文十一年に東廻り航路を開拓した。陸奥国の城米を江戸に輸送するため、阿武隈川の河口から廻船で房総半島に向かい、相模三崎または伊豆下田に立ち寄って江戸湾に入る航路である。これにより、輸送に要する時間と費用を大幅に軽減することができた。

一方、出羽国の城米を江戸に輸送する住む船主も北前船を運営するようになった。

この北前船でも多く用いられたのが弁財船である。弁財船は「千石船」とも呼ばれるようにおおむね千石積のものが標準で、物資の買積には適していた。また、日本海の荒波をしのげるように船首の反りを大きくするなど、船体の耐波性・安定性の面で工夫が重ねられ、独自の進化を遂げていった。

北前船の発展と瀬戸内海の港町

北前船の発展は瀬戸内海の港町にも変化をもたらした。

瀬戸内海海運は中世以来、航海の安全のため沿岸部を航行する「地乗り」が普通であった。しかし、北前船のように堅牢な大型船が登場すると、時間を短縮するため沖合いを航行する「沖乗り」が行われるようになり、新たに島嶼部に風待ち、潮待ちの寄港地が発達することになった。

そうした港町が備後田島、安芸国大崎下島の御手洗、安芸国倉橋島の鹿老渡、伊予国津和地島、周防国大島の家室などである。なかでも御手洗は風待ち、潮待ちの代表的な港であった。御手洗がある大崎下島は芸予諸島のほぼ中央部で、山陽、四国ともほぼ等距離

るには、日本海を北上し、津軽海峡を経て太平洋に出て江戸に向かうコースが一番近かった。しかし、津軽海峡の通過は危険も多く、日本海を南下し瀬戸内海を経て江戸に到達する西廻り航路が注目された。

そこで瑞賢は最上川の舟運を利用して城米を酒田に運び、そこから廻船に積み替えて海路をとった。これが西廻り航路で、途中の寄港地は、佐渡の小木、能登の福浦、但馬の柴山、石見の温泉津、長門の下関、摂津の大坂、紀伊の大島、伊勢の方座、志摩の安乗、伊豆の下田であった。

城米船には日本海の高波に慣れた大型廻船が採用されたが、なかでも多く使われたのが瀬戸内海の塩飽諸島で造られた、瀬戸内海独特の「弁財船」と呼ばれる和船であった。弁財船は逆風でも帆走が可能で、しかも船体が頑丈であるという特徴があった。そのため、短期間に普及し、改良を加えながら、次第に日本海の高波でも主流となっていた。

北前船の登場と瀬戸内海運の変化

塩飽諸島の船乗りは南北朝、室町期を通じて水軍力や水運力を増強し、その技術は江戸時代でも海運関係者からにあり、向かい側の島との間の水路が自然の良港を形成していたので大いに発展した。

塩飽廻船の高い技術は江戸時代末にも活躍の場を得た。幕末期、幕府は海軍の拡充に着手するため外国から「咸臨丸」を購入したが、この時、船乗りとして数多く採用されたのは塩飽廻船の船乗りたちであった。また、咸臨丸が初めて太平洋を横断した時も瀬戸内海の船乗りたちが乗り込んでいた。

近世海運の発達において大きな役割を果たしてきた塩飽廻船は、近代の夜明けにおいても大きく貢献したのである。



国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている御手洗 写真提供:呉市

島を結ぶ

瀬戸内しまなみ海道

〈広島県・愛媛県〉

長年の夢であった
瀬戸内しまなみ海道

広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ西瀬戸自動車道(瀬戸内しまなみ海道)が開通したのは一九九九(平成十一)年である。



瀬戸内しまなみ海道を眺めながら走るサイクリスト 写真提供:尾道市

み海道の開通は長年の夢であった。この開通を控えて、西瀬戸自動車道周辺地域振興協議会などが設立され、自動車道の愛称募集や共同観光キャンペーンなど、さまざまな機会を通じて、共通のイメージを持ちながら事業を展開してきた。

特に、二〇〇七(平成十九)年に新組織として設立された瀬戸内しまなみ海道振興協議会は、二〇一〇(平成二十二)年に成立した「観光圏整備法」に基づく観光圏整備計画の認定を受け、「しまなみ海道 海響ツーリズム」を基本コンセプトに、「世界に誇れる多島美」「世界一のサイクリングロード」「しまなみ人とのふれあい」を目標テーマとしてさまざまな広域観光施策を展開してきた。

その中で、とりわけ人気が高く、全国的に注目されているのが瀬戸内しまな

み海道のサイクリングロードである。
日本初の自転車歩行者専用道路を併設

瀬戸内しまなみ海道は尾道市の西瀬戸尾道インターチェンジを起点に、瀬戸内海の向島、因島、生口島、大三島、伯方島、大島などを経て今治市の今治インターチェンジに至る全長約六十キロの高規格幹線道路(自動車専用道路)である。このうち、尾道から生口島までが広島県、大三島から今治までが愛媛県に属している。

瀬戸内しまなみ海道は広島県と愛媛県との間の芸予諸島を島伝いに繋ぐ自動車専用道路ではあるが、新尾道大橋以外の橋には日本初となる自転車歩行者専用道路が併設されている。この専用道路を活用し、風光明媚な芸予諸島を眺めながら快適なツーリングを楽しもうというのが瀬戸内しまなみ海道のサイクリングロードである。

尾道市と今治市は、より多くの人たちにサイクリングを楽しんでもらうため、瀬戸内しまなみ海道の十五ポイントにレンタサイクルターミナルを設置し、自転車の貸出や返却(乗り捨て)を受け付けている。また、サイクリストが気軽に休憩やトイレ、給水、空気補充などができるように「しまなみサイクルオ

アシス」も設けている。これは、瀬戸内しまなみ海道沿いの商店や民家、農家レストラン、農家・漁家民泊、ガソリンスタンドなどから、庭先や駐車場などを休憩所として開放してもらえ、人を募集したもので、現在四十近いオアシスが認定されている。

山陰・山陽・四国の
連携強化

レンタサイクルの料金は、大人(中学生以上) 一日五百円、子ども(小学生以下) 一日三百円で、別料金となるが電動自転車や二人乗りができるタンDEM自転車も用意されている。

レンタサイクルの利用実績を見ると、開通年度は約七万台であったものの、その後は減少し、一時は三万台を切った。しかし、スポーツツーリズムの高まりや、新型自転車の導入といった施策が功を奏し、昨年度は約六万台にまで増加している。

数年後には尾道市と島根県松江市を結ぶ中国横断自動車道尾道松江線の全線開通も予定されている。尾道松江線が瀬戸内しまなみ海道と一体となることで、山陰・山陽・四国の連携を強化し、沿線地域の社会経済・生活文化の発展に大きく寄与することが期待されている。

地域の母親との交流を大切に、学生たちが子育ての現場で奮闘

〈山口県下関市〉

少子高齢化、核家族化や人間関係の希薄化によって、子育ての現場では母親力や支援機能の低下などが深刻な問題となっている。子育て中の親は「密室育児」による孤立感や閉塞感から虐待に至るなど、育児の現場では喫緊の課題が急増している。

山口県下関市にある梅光学院大学は創立141年の伝統を誇り、地域社会や他者のために生きる人材の育成を目指してきた歴史ある大学である。2005(平成17)年4月には、時代の要請に応える保育者や教育者の育成を目指して「子ども学部子ども未来学科」を創設。附属施設として「梅光多世代交流支援センター」を発足させ、子育て支援を通じた多世代交流を開始した。また、当センター内に、大学の教員や子ども学部の学生たちが子育て支援を実践する場「つどいの広場梅光ほっとみーる」を設けた。最初は手探りの活動であったが、8年目を迎えた今、その活動が全国から注目されている。

「梅光ほっとみーる」の活動内容には大きく3つの柱がある。第1に幼い子どもと親が心地よい時間を過ごせる場所づくり。第2に育児の現場から上がってくる育児相談。第3に親の育児力を高めるスキルアップである。ほっとみーるの施設は大学の近くにあり、毎月延べ1,000人以上の親子が来訪する。

具体的活動は「遊び場」「学び場」「交流の場」の3つの場の提供である。「遊び場」としては、平日の10~15時に0~3歳児とその親に自由に遊ぶ居場所を提供しており、時には季節のイベントや散歩なども行う。「学びの場」では、子ども学部教員による育児講座の開催、常駐保育



優しい表情で赤ちゃんを抱く男子学生

士の育児相談、母親のスキルアップのための勉強会などを開催している。「交流の場」は、「プレママの集い」という初めての妊娠出産ママと先輩ママの集いや、「ステップアップママの集い」という子どもが集団生活に入ったママの交流の場である。季節のイベントは、母親たちのボランティアの企画で宝探しゲーム、座談会、稲刈りとおにぎり作りなど、さまざまなイベントを開催。親子とも楽しんで元気いっぱいになるという。

また、梅光ほっとみーるの大きな特徴は、子ども学部の学生も参画し子育て支援を実践していることだ。学生たちは、授業で培った知識だけでなく現場で実際に自分の目で見て肌に触れて子育ての大変さを学んでいく。

「子どもは知らない人には近づきませんが、毎週やってくる学生たちにはすぐに打ち解け、お兄ちゃん先生、お姉ちゃん先生が来るといって、とても喜びます。学生たちも最初はオムツ替えや抱っこが上手くできませんが、次第にできるようになり、現場での実践は大いに刺激になっています」とは、子ども学部の今村方子学部長。

2010(平成22)年には学生たちとともにファミリーコンサートを開催した。コンサートに行く機会が持てない乳幼児を抱えた母親に好評だった。このように学生たちが地域の活動に入り込んでいく場合もあれば、逆に母親たちを大学の授業に招いて交流をするなど、交流の場を積極的に持ち大事にしている。

「学生たちが子育ての現場での実体験を手がかりに、将来、自分たちが働く職場やワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)を学ぶ、またとないチャンスなのです。コミュニティの力を上げていくためには、学生も外で学ぶことが大切」と、今村学部長。子育ての現場で社会に生きる自分の役割を見いだす活動が、学生と地域と大学の3者をつなぎ付けた好例として今後も注目される。



お母さんたちと交流する学生たち



「無心」の境地でマーケットニーズに応える

株式会社清水 社長 清水 昭允 〈鳥取市〉

毎日座禅を組み、 住職の講話を聴く

凍てつくような寒風の中、青年は木刀を手に二キロの道のりをひたすら走り続けた。午前四時半、町はまだ深い眠りにあった。

目指す先は鳥取藩主池田家菩提寺の興禅寺である。境内に着いた青年は、休む間もなく、檜の大木を相手に素振りを繰り返した。全身から発せられた熱が白い湯気となり、青年を包み込んでいった。素振りが終わると、青年は本堂で坐禅を組んだ。

「雨の日も雪の日も、毎日座禅を組み、住職の禅話会が開かれる時は必ず講話を聴きました。座禅はもともと叔父から勧められたのですが、私の生真面目さが目に止まったのでしょうか、住職から叔父に『見どころがあるから僧にしないか』という誘いもあったようです」

今から約半世紀前のエピソードを思い出しながら、企業家は笑みを浮かべた。鳥取市にある株式会社清水の清水昭允社長（75歳）である。優しさに満ちた表情が印象的な企業家だ。

清水社長は一九三七（昭和十二）年に大阪で生まれた。清水家は清水社長五代前から鳥取県若桜町で鍛冶屋を営んでおり、そこで修行した弟子たち

は各地で独立していった。そうしたなか、清水社長の父親は弟子たちに原材料の鉄を卸す商売を始め、一九二七（昭和二）年には大阪へ出て金物商を営み始めた。そのため清水社長は大阪で生まれた育ったのだが、戦時中の空襲が激しくなると、小学二年の時に創業地に近い鳥取県八頭町に疎開し、その地で終戦を迎えた。

手形の不渡りで 会社が連鎖倒産

戦後、鉄は統制物資に指定されていたが、一九四九（昭和二十四）年には統制が解除された。それを機に清水社長の父親も清水金物店（後に清水鉄鋼商店に組織変更）を開業し、トタン板や波板、釘などを扱った。

戦後復興とともに清水金物店の事業も着実に成長していったが、一九五二（昭和二十七）年四月に大事件が発生した。鳥取市内の空き家から発生した火が、フェーン現象による強風もあつて、市街地のほとんどを焼き尽くしたのである。罹災者約二万人、罹災家屋約五三〇〇戸という甚大な被害をもたらした鳥取大火である。

清水金物店の店も焼失したが、急ぎよバラックを建てて営業を再開した。大火のほぼ二週間前に高校に進学したばかり

りの清水社長は、土日はもちろん、平日も高校から帰ると店の手伝いに追われた。大火から復興するために金物の需要が急激に高まり、店はてんでこ舞いの忙しさだったのだ。

「そんなある日、父親から『大学は行かずに家業を継いでくれ』と言われてました。店の忙しさは実感していましたから、高校を卒業すると、そのまま商いの道に進みました。大学で勉強したいという気持ちになかったといえれば嘘になります。親が、もともと素直な性格ですから、親の言うとおりにしました」

大火復興が一段落すると、郡部を中心に簡易水道の敷設工事が始まり、引き続き鉄鋼製品の需要は高まっていた。それとともに清水鉄鋼商店の売上も順調に伸びていった。

しかし、そこに思わぬ落とし穴があった。当時はまだ戦後復興の時代で、今とは違い取引先と契約書を交わすことも少なかった。そのため、工事が終わるとどこかに消えてしまいう取引先も多く、手形の不渡りを食らうことも多かった。清水鉄鋼商店もその関係で連鎖的に不渡りを出し、倒産してしまっただ。

経済企画庁の『経済白書』が「もはや戦後ではない」と高らかに宣言した翌年、一九五七（昭和三十三年）のことである。清水社長はまだ二十歳であった。



稲垣老師による「無 一物中無尽蔵」の額

profile

清水 昭允（しみず・てるみつ）
1937年大阪府生まれ。鳥取市内の高校を卒業後、清水鉄鋼商店に勤務。1958年に有限会社清水商店を設立し、社長に就任。清水商店は1988年に株式会社清水に組織変更。清水は、資本金は5,000万円、従業員数は74名である。

文：城市 創（鳥根県益田市出身） 写真：井上 耕之介（鳥取市在住）



大型設備の導入で強さを発揮



ワンストップサービス化をさらに進展させたMC加工

「無心」でお客さまの 気持ちを考える

会社が倒産したとはいえ、家族が暮らしていくためにはやはり商いしかなかった。これまで取引があった仕入れ先などに相談すると、「お前に任せるから、しっかりやれ」という言葉が返ってきた。そこで、取引先などの協力を得て、一九五八（昭和三十三年）に資本金三百万円で有限会社清水商店を設立し、社長に就任した。弱冠二十一歳、借金二千万円を抱えてのスタートである。

「しかし、商売のことはほとんど知りませんから、どうすれば良いのか、まったく分かりませんでした。そこで同じ金物業を営む叔父に相談したところ、『まずは坐禅を組んで精神を練れ』と、興禅寺を紹介されたのです。当時の住職は稲垣丹田（たんけん）老師で、私はたくさんのことを教わりました」

大きな負債を抱えての船出であったが、清水社長はそのことを悔やみはしなかった。むしろ、長男として家族の生活を守つていこうという気持ちが強かった。しかし、「鉄」という文字は「金」を「失」と書くように、鉄の商売はなかなか儲けなかった。

「ある時、稲垣老師にどうすれば儲かるでしょうかと尋ねました。すると、『無土地の購入はもちろん自社の業績拡大を見込んだ先行投資であるが、それとともに地元の産業振興にも役立てている。清水の隣にある協同組合千代金属センターは、清水社長がベンチャー企業を集め、国の資金を活用して工場アパート団地として設立したもので、現在は六社が組合員となっている。また、清水が購入した敷地内に貸工場を建設して、新しいビジネスを目指しているのに工場を確保できない企業に貸し出しており、現在は五社の鉄工所が入居している。」「貸工場に入居した企業の中には鳥取ダイヤモンド電機株式会社（現在はダイヤモンド電機）のように、その後上場した企業もあります。そうしたベンチャー企業をサポートできるのも私の大きな喜びです」

国や多くの地方自治体では産業政策としてインキュベーション（起業支援）を行っているが、清水はそれを先駆的に行ってきたのだ。

ワンストップサービスで 強さを発揮

業績を着実に拡大するとともに、清水社長は常にお客さまの立場から新しい付加価値を追求し続けていった。その一つが、切断の一次加工から、孔開けや

心になれ」と言われました。金を儲けようという「有心」でお客さまに應對するのではなく、「無心」でお客さまの気持ちを理解しようとするれば、商売は成り立つと言われたのです。この言葉は、事業を展開する上で大きなヒントとなりました」

こう語ると、清水社長は一枚の額を手にした。そこには稲垣老師による「無一物中無尽蔵」という文字が書かれている。たった一つのものであつても、そこには無尽蔵に何かがある。清水商店の事業に当てはめれば、鉄を流通させるだけでなく、加工などで付加価値を高めていけば、たくさんの事業が広がってくるということだ。今でこそ高付加価値化は経営の常識ともなっているが、稲垣老師は昭和四〇年代に指摘したのだ。

付加価値を追求して、清水社長がまず取り組んだのは切断加工だった。お客さまが欲しい長さ、太さに切断して納品すれば、お客さまには喜ばれるし、利益も増えてくる。その次には孔を開けたり、曲げたりして納品するようにした。切断や孔開けなどには設備が必要だが、そこまで揃えているお客さまはほとんどなく、清水商店のマーケットは着実に広がり、利益率も高まっていた。

曲げ折りなどの二次加工、研磨や仕上げなどの三次加工、さらにはMC（マシニングセンター）加工などの四次加工まですべて自社内で行うワンストップ化である。

「同業者を分析してみると、マーケットが大きいこともあつて、山陽側の工場は加工が分業化されており、すべての加工を担える工場はありませんでした。それならワンストップサービスでいこうと決断したのです。しかも、インターネットで図面も簡単に送れますし、何よりも加工段階ごとにいちいち図面を送る必要もありませんから、発注者の負担もぐっと減ってきます」

さらに、ワンストップサービスの価値を高めているのが、自社の専用トラックを使った納品である。これまでは、配送専門会社に納品を委託していたため、積載量がある程度まとまらないとトラックは動かなかった。そのため、直前まで納品日時が確定しないことも多かった。それを、自社専用トラックを定期的に走らせることで、積載量の多寡にかかわらず決まった日時に納品できるようにしたのだ。これは、お客さまから好評を得るとともに、山陽や関西といった巨大マーケットで戦える大きな強みとなっている。

清水社長は一昨年鳥取商工会議所の会頭に就任した。来年には中国横断自

最新鋭機械を 導入しながら業容を拡大

成長への道を見いだした清水商店にさらに追い風が吹いてきた。一九六六（昭和四十一年）年に三洋電機グループの一つとして鳥取三洋電機株式会社（現在は三洋電機株式会社CEビジネスユニット）が設立され、清水商店も棚や金型など製品づくりの補助部材などを納入するようになったのだ。

それと機を同じくして、本社と倉庫を現在地の鳥取市古海（ふるみ）に移転するとともに、鋼材切断加工を本格的に行えるように、最新鋭機械を多数導入した工場を建設した。その後も、鉄の需要増大に伴って事業は拡大し、土地を購入しては工場を建設し、最新設備を導入していった。

「これまで土地を購入したのは三十八回です。創業時の敷地は四五〇坪でしたが、おかげさまで現在は一万三〇〇〇坪になっています。土地の購入にあたっては、不動産会社などに頼むのではなく、私が直接地主さんと会って交渉しています。大切な財産ですし、お互いにきちり納得することが大切だと考えているからです。それ以上に、人と会って話し合うことが根っから好きだということもありますね」

自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）が開通し、鳥取の経済が大きく変わる節目を迎える。

「自動車道が開通すれば、大阪の梅田まで自動車で二時間半です。これまで以上に観光産業を成長させていくことも必要ですが、同時に新しい技術を生かしたものづくりにも力を注ぐ必要があると思います」

そう語ると、清水社長は静かに稲垣老師の額を見つめた。その眼差しからは、「無心」の気持ちでマーケットニーズを探り、それに応える製品やサービスなどを提供し続けていこうという、経営者の強い意思が伝わってくるようだ。



マシニングセンターなどが設置された新工場

低品位のスクリップから 高品位・高付加価値の铸造品を生産

《広島市》

不純物の少ない鉄スクラップの安定的確保が大きな課題となる中、特殊アーク炉の技術で高品質の鉄製製品を製造・販売してきた木下製作所は、新連携事業等を活用し、不純物と金属化合物を除去するシステムを開発し、铸造品の安定供給に大きく貢献しようとしている。



低コスト化を実現した取鍋式マンガン除去装置

日用品から産業機械まで 幅広く使われる铸造品

鉄瓶やスキヤキ鍋といった日用品から産業用機械まで、铸件はさまざまな分野で用いられている。铸件は、加熱して溶かした金属を型に流し込み、冷えて固まった後、型から取り出して作った金属製品である。その歴史は古く、紀元前四〇〇〇年頃のメソポタミアで銅を溶かして型に流し込み、いろいろな器物を作ったのが始まりとされる。その意味で、人類のものづくりの歴史において最も古いものの一つといえる。

铸件がこつした長い歴史を持ち、さまざまな分野で使われている大きな要因は、使い勝手が良いことと、耐摩耗性や熱伝導率など多面的な特性、機能を持っていることだ。特に、複雑な造形が可能であるため、鉄はシリンダーブロックやカムシャフトといった自動車部品に多く使われており、自動車の重量の約一〇

スクラップに含まれる 不純物が大きな影響

しかし近年、铸造業界に大きな課題が浮上してきた。鉄の原材料である鉄スクラップに含まれる不純物の量が増加しているのである。日本の鉄鋼の蓄積量は増加の一途をたどっており、それに呼応して鉄スクラップの排出量も増加している。これらは再び鉄鋼製品へとリサイクルされていくべきであるが、不純物の増加は鉄にも影響を及ぼしているのだ。

「自動車では、強度アップや軽量化などを実現するため、合金成分などを添加したハイテン材（高抗張力鋼材）や表面処理鋼板の使用比率が五〇パーセントを超えるようになりました。こつした不純物が多いスクラップを原材料にすると、鉄の品質悪化といった問題が発生します。それを防ぐためにも、不純物を除去するシステムの開発と普及が大きな課題となってきたのです」

こう語るのは、広島市に本社がある株式会社木下製作所の木下潔社長である。木下社長は「不純物除去システムは、鉄製業界において、これまで原材料である不純物の少ない鉄スクラップの確保は比較的容易であった。しかし、二〇〇三（平成十五）年からの中国での需要増大等の影響で、不純物の少ない鉄スクラップの確保が難しくなり、急激な価格上昇も起こっている。その意味で、生活や産業の基盤である鉄製原材料の安定的確保は社会的課題ともなっている。」

新連携事業でスタートした鉄溶湯中の不純物除去システムは、低品位のスクラップから高品位・高付加価値の铸造品を生産できる画期的な技術として、铸造品の安定供給に大いに貢献すると期待されている。



不純物の少ない溶湯を連続的に得ることができるKS式電気炉（特殊アーク炉）

切削粉をアークプラズマ（気体中での放電）で急速に高温溶解し、その過程で脱酸、脱硫の精錬を行うものだ。これにより不純物を除去し、清浄度の高い鉄を得ることができ、内部欠陥の減少、薄肉軽量化といった成果が得られる。また、鉄もコークスも不要で、切削粉をそのまま鉄として溶融できるため、効率的な再利用炉としても注目されている。

不純物と金属化合物の除去

不純物、とりわけ鉄の伸びを低下させるマンガンを除去する方法はこれまでいくつか考案されてきたが、実用化には至っていなかった。そこで、国の戦略的基盤高度化支援事業を活用し、団法人日本铸造協会を中心に企業・団体・大学等が鉄溶湯中の不純物（主にマンガンの除去技術の開発に取り組んだ。その結果、酸素バーナーとバブリング機能（空気の吹き込みによる攪拌）を備えた装置でマンガンをスラグ（鉱さい）化して除去できることが分かった。この装置の製作を担当したのは大阪府八尾

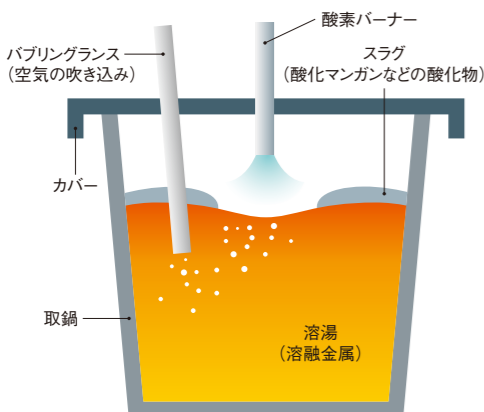
市の株式会社ナニワ炉機研究所で、装置の実証実験を行ったのは木下製作所である。この装置の開発では回転炉式装置で実験を行ったが、铸造過程で一般的に使われている取鍋（とりなべ）の上に酸素バーナーとバブリングランス（空気の吹き込み）を設置すれば低コストで簡単に除去できることも判明した。

それに引き続いて、木下製作所は鉄溶湯中の金属化合物（主に酸化物）を除去するため、アーク式金属化合物除去装置の開発に取り組んだ。これにより、マンガンを主とする不純物の除去装置と、酸化物を主とする金属化合物の除去装置を組み合わせた新しい鉄溶解システムの開発が具体化してきた。そこで木下製作所は国の「新連携事業」を活用し、ナニワ炉機研究所などと連携して鉄溶湯中の不純物除去システムの開発・販売に取り組んでいる。

新連携事業で铸造品の 安定供給を目指す

「不純物は取鍋式マンガン除去装置で、金属化合物はアーク式金属化合物除去装置で除去できますし、両方の装置を駆使すれば高品質な製品を製造できます。この装置を導入することで、顧客は低品位の原材料を使うことも可能となりますし、大幅なコストダウンを実現

■取鍋式マンガン除去装置の概念図



ステンレスの研磨技術で

ステンレスの可能性を広げる太華工業

〈山口県周南市〉

エレベーターの扉やシステムキッチンなど、日常生活のさまざまな場面で使われているステンレス。その研磨事業に特化した太華工業は、研磨技術を高めながら、プレスプレートといった新しい事業領域を開発し、ステンレスの可能性を広げている。

ステンレスを軸に 新しい事業展開

太華工業株式会社の創業は終戦からほぼ六カ月後の一九四六（昭和二十一年）二月である。創業者の磯村安夫氏（故人）は地元の徳山鐵板株式会社（その後、日新製鋼株式会社）と請負契約を締結して構内作業を行うようになり、一九五七（昭和三十三年）には有限会社太華工業所を設立した（その後、一九七一年に太華工業株式会社に組織変更）。

構内作業を主とした太華工業所に大きな転機が訪れたのは一九五九（昭和三十四）年である。前年、日新製鋼は南陽工場（現在の周南製鋼所）を竣工させるとともに、ステンレス鋼の一貫製造をスタートさせた。ステンレスはあらゆる材料の中でも傑出した強度

と耐食性を持っており、その特性に着目した日新製鋼は先駆的にステンレス量産時代を切り開いていったのである。太華工業では日新製鋼の構内作業を続けるとともに、今後の事業展開について模索する時期が続いていた。「着実にステンレスの時代を迎えようとしており、日新製鋼からも、構内作業だけでなく、ステンレスを軸とした新しい事業展開を考えたらどうかというアドバイスをいただきました」と、中川宣夫社長は当時の様子を語ってくれた。

これを機に、太華工業はステンレスの研磨加工、さらにはステンレス鋼板の切板販売を開始した。

加工技術の 高付加価値化を追求

は、ステンレスの表面を研磨目の方向性がない鏡面に仕上げたり（鏡面仕上げ）、研磨目が放物線状になるよう均一に仕上げたり（バイブレーション）、見る角度により仕上げの雰囲気異なる三次元をイメージした仕上げ（かすり）にしたりするものだ。

「この高級意匠研磨は、高級化・個性化が進む時代にふさわしい素材としてのステンレスの可能性を示したもので、全国の多くのビルや公共施設などに導入されました。特に、鏡面・バイブレーションでは現在でも三〇パーセントのシェアを確保しています」と、中川社長は説明してくれた。

ステンレスの 機能性を生かす

高級意匠研磨は研磨の高付加価値化を追求したもののだが、その追求は現在でも引き継がれ、ステンレスの機能性を生かした新マーケットの開拓に繋がっている。代表的なものが半導体のプリント基板やクレジットカードなどの製造に使うプレスプレートであり、ロゴマーク等を使用されるステンレス箔である。

最近のプリント基板は電子部品の処理能力を上げるため多層化が進んでいるが、そのためには圧力をかけて樹脂

あつたが、研磨だけでは他企業との価格競争に陥ってしまう。そこで考えたのが、サイズや素材特性などについてお客さまの幅広いニーズに合わせてス

テンレスを加工し、販売することだった。それが可能となったのは、ステンレスで屈指のメーカーである日新製鋼との深い信頼関係があつたからである。サイズについてはハガキからビル建材用の大きな板まで豊富な品揃えが可能であるし、素材についてもお客さまのニーズをダイレクトに素材製造段階に反映させることができる。

こうしたステンレスの加工販売事業を展開する一方で、太華工業は加工技術の高付加価値化を追求し続けてきた。その一環として実現したのがステンレスの高級意匠研磨である。これ

を押さえる作業が必要となり、より硬く表面粗度の均一性を求められるプレスプレートが必要となっている。他方、ロゴマーク等で使われる極薄のステンレスでは表面疵を限りなく除去することが求められ、特に近時取り組んでいる厚さ〇・一ミリのステンレス箔の研磨に至ってはマイクロン単位でのコントロールが求められている。

「これらに対応する研磨技術力こそわが社の強みです」と、中川社長は胸を張って語った。

こうした高付加価値の研磨製品は量的にはそれほど多くはないものの、利益面での貢献は大きい。特に最近では、これまでステンレスとは縁のなかつたと思われるお客さまからもさまざまなサンプル要求が寄せられている。その一つ一つに対応し、テストを重ねた結果、新しいユーザーになってくれるケースが多いのだ。

「もちろん、お客さまによって仕様は異なりますから、それだけ手間ではあります。しかし、お客さまの注文に細かく対応することで、新しいマーケットは着実に開けてくると確信しています」と、中川社長は力強く語った。

ステンレスは、その種類だけでも何百種類もあり、しかも研磨方法も多様で、用途もまだまだ広がると期待さ



カードの製造にもステンレスが使われている。



高級化・個性化を追求した高級意匠研磨のサンプル

写真撮影：宮本 剛（山口県周南市在住）

現代文明への問いかけを込めて

チェンバロを製作する難波修さん

バロック音楽に欠かせないチェンバロ。中四国でただ一人のチェンバロ製作家は、複雑で豊かな響きの世界を再現することで、現代文明に対し静かな警鐘を鳴らしている。



profile

難波 修 (なんば・おさむ)

1971年岡山県総社市生まれ。名古屋、東京、横浜で育つ。横浜市立南高校を経て武蔵野音楽大学器楽科卒業。1997年、堀洋琴工房に入り、堀栄蔵氏の最後の弟子となる。独立後はプロ、アマチュアの演奏家らにチェンバロを提供する一方、県内外のコンサートに自作チェンバロの貸し出しを行っている。

文・鈴木 富美子(岡山市在住) 写真・林田 悟(岡山市在住)

一度は滅びかけた古楽器 伝統を引き継ぐ 希少な作り手

チェンバロという楽器をご存じだろうか。ハープに似た典雅な音色が特徴の鍵盤楽器である。鍵盤はピアノと白黒の逆転した配色で幅が狭く、全体的にピアノより小ぶりだ。

一八世紀まで鍵盤楽器の代表だったが、徐々に、より強弱表現に長けるピアノに人気を奪われ、一九世紀中にはほとんど演奏されなくなった。楽器製作の伝統もいったん途絶えたという。

しかし、一九世紀末から古楽演奏のために復活され、今やバロック音楽には欠かせない楽器として人気を集める。クラシックのコンサートや音楽CDなどで耳にしたことがある人も多いかもしれない。

そんなチェンバロの作り手は日本国内でも十数人程度だが、中四国でただ一人、製作を手掛けているのが、岡山県総社市の田園地帯に工房を構える難波修さん(41歳)だ。

西洋と日本の差を認め 音楽の原点を突き詰める

難波さんはもともと武蔵野音楽大学でオーボエを専攻した経歴を持つ。



製作には数え切れないほどの細かな作業が必要である。

演奏家としての修練を重ね、音楽を突き詰めていくうち、日本人として西洋文化に取り組む上での究極の壁に突き当たった。

日本と異なる歴史や言語、宗教といったものを背景に持つ西洋の音楽を極めるには、日本人である自分にはどうしても限界がある。その限界、すなわち西洋人のアイデンティティと自分の持つ日本人のアイデンティティとの差をはっきり認めて、そのうえで「何が共有できるのか、どんな新しいものを創り出していけるのか、そこを突き詰めていきたいくなった」と、難波さんは話す。

そのために、西洋音楽の源流により

近いバロック音楽へと関心は向かい、さらに、バロック音楽を生み出す古楽器、ひいては古楽器の音づくりへと探究心は深まっていた。昔の音響像を探ろうと古典調律を学ぶうちに、単音しか出せないオーボエではなく、音律を確かめるために複数の音による響きを作り出せ、音響装置としても完結性の高い楽器チェンバロの製作へと向かっていったのだ。

内弟子に入って修行 工房構え本格的な製作を

こうして大学卒業後、海外の博物館や楽器製作の現場を巡った後、一九九七(平成九)年、埼玉県の堀洋琴工房へ入った。日本でチェンバロ製作の第一人者として知られた堀栄蔵氏(二〇〇五年没)に弟子入りしたのだ。

住み込みで、料理や掃除、洗濯などをしながらの修行は、何かを教わるのではなく、自ら見て考え学びとするスタイル。「仕事を見てもよいので、そこから学べということでした。そうしなければ、真に身につかないというのが師匠の持論でした。もちろん、最初からできるわけではない。それでもじつと我慢して許容してくれる。つまり本当の意味で私を育てようとしてくれたわけです。それが今の私につながっているの



チェンバロを彩る絵

です」

三年間の修行の後、難波さんはひとまず実家のある総社市へ帰って独立。その後も堀氏の工房に通いながら製作を手掛けた。二〇〇八(平成二十)年には、実家に工房を構えて、本格的な製作活動をスタートさせた。

巨大な丸木梁を渡した約四十平方メートルの作業場には、大型の木工機械やカンナなどの手工具がひしめき合う。まるで建築現場かと見紛うほどの設備である。優美なカーブを描く大きな側板の曲げ加工から、鍵盤に連動して弦を弾く精密な部品の加工まで、絵入れと塗装以外は、すべて一人でこなす。

作業工程は「面倒なので数えないことにしています」と苦笑するほど多い。音が出せる状態になるまでに三カ月から半年はかかるという。

確かなイメージがあれば形にするのは容易

プロ、アマ含め国内の演奏家からの注文を受け、演奏される地域の気候風土に合った木材を選ぶ。実際に木に触れ、素材と向き合つて会話をし、基準となる音の高さや耐久性、依頼主の要望も加えて構想を練る。「作業は九割方が構想すなわちアイデア」と難波さん。工程がいかに複雑であろうと、「確固としたイメージを構築するより

は、イメージを形にする方が容易です」と言い切る。

これまで手掛けた作品は、修行時代も含め十一台。年間一、二台の製作に加え、コンサートへの楽器の貸し出し、調律、メンテナンスなどで生計を立てる。もちろん生活は楽ではない。しかし、大量生産できる楽器でもない。ものづくりの原点、つまり「創造は神様の仕事。世界を読み取り、発見してゆくのが我々の仕事」というスタンスに立ち、ひたすら製作に邁進する日々だ。

疑問を持たない現代人 バランス感覚が必要

チェンバロの前で難波さんが手を叩く

と、静けさの中からかすかな響きが聴こえてくる。百八十本もの金属製の弦

がわずかな空気の変動に反応しているのだ。強力に張った弦をハンマーで叩きペダルで残響を広げるピアノとは対照的に、チェンバロは小さな爪で弦を弾いて音を出す。その音はクリアで繊細、余韻が味わい深い。

西洋の歴史においてピアノの発展は産業革命と見事に重なる。より大きく、より強く。音量や強弱の幅広さとして引き換えに失ったものをチェンバロは表現する。それは優劣で語れるものではない。ただ、バロック時代には、「ささやかだけれど複雑で豊かな響きの世界を味わう感性が存在した」というこ

となのだ。

「例えば電氣的に増幅された音、聴く者の意思とは関係なく鳴り続けるBGM、街中の音楽……。今の人は、何も疑問を持たない。なぜそうなのかを問わない。好奇心の持ち方までコントロールされてしまっている」。古楽器を通して現代社会を見据える難波さん。

「要はバランスの問題。『慣化』した聴覚が、より大音量で刺激的な音楽を求めるように、一方的でバランスを欠いた事象がさまざまな分野で起きていないでしょうか」と続ける。

チェンバロを作り、音の世界を追求し続けることで、現代文明に静かな警鐘を鳴らしているとも言えそうだ。



チェンバロを弾きながら音を確認する難波さん



微調整を繰り返すことで、味わい深い繊細な音が生まれる。

鈴木 富美子 (すずき ふみこ)
1964年岡山市生まれ。大学院修了後、高校教師、出版社勤務などを経て、現在はフリーライター。福祉、環境、教育など幅広いテーマで取材・執筆活動をしている。

ご当地

B

級グルメ

8

いただきます

《鳥取県弓浜半島》



大きな三角形の油揚げの中に具材をぎっしり詰めた「いただきます」は、鳥取県西部の弓浜半島を中心に親しまれている郷土料理である。調理法は、生米と一緒にシイタケやゴボウ、ニンジンなどの野菜を薄く油揚げの中に詰め、だし汁でじっくり炊き上げるものだが、各家庭によって具材や味付けが異なり、鶏肉や赤貝を入れる家庭もある。

言い伝えによると、江戸時代に米子市の隣の境港市にあるお寺の住職が福井県のお寺で出された油揚げを持ち帰り、その後、明治時代中頃から米や野菜を詰めて炊いたのが始まりと言われている。別名「のこめし」とも言われている。

ところで「いただきます」という名前の由来であるが、昔はお祭りなどの行事があると各家庭で作る近所に振る舞ったことから、近所の方の「頂く」という感謝の気持ちのまま「いただきます」という名前になったと伝えられている。「その他にも、三角形が近くの秀峰・大山の頂上に似ていることから名付け

られたという説もあります」。こう語るのには「米子いただきます隊」の松原毅会長である。米子いただきます隊は、郷土の味である「いただきます」を継承しようと活動している市民団体で、約四十名の地元有志で構成されている。

「いただきます」は百年の歴史を持ちながら、情報発信が弱いため米子を訪れる人々にはあまり知られていない。そこで、米子いただきます隊は、調理法や提供する地元飲食店を紹介するパンフレットやポスターを作製するとともに、イベントなどでは「いただきます」を味わってもらっている。

「いずれはご当地グルメのB-1グランプリにも出場してみたいですが、それとともに子どもたちに継承していくことが大切だと考え、若い人々を対象とした料理教室も開催しています。子どもたちに今伝えておけば、数十年は忘れないと思いますから」と、松原さんは笑いながら語った。

「いただきます」が誕生して約百年。その味を次の百年に伝えようという米子いただきます隊の取り組みは着実に歩みを重ねている。



藩ものがたり Ⅱ

松江藩

〔島根県〕

水の都を象徴する宍道湖畔に松江城と城下町が開府したのは今から四百年前のことである。そこを拠点に松江藩は、藩政改革や財政再建に取り組み、独自の経済文化を構築していった。その歴史は今なお、松江の文化に色濃く残っている。



国の重要文化財となっている松江城

松江城下町の 基盤を築いた堀尾氏

関ヶ原の戦いの後、出雲・隠岐の二国には浜松から二十四万石で堀尾忠氏が入部した。忠氏の父・吉晴は豊臣政権の中核の一人として活躍したが、関ヶ原の戦いでは東軍に味方したため、加増されての転封だった。

当時の出雲の政治的な中心は月山富田城（現在の島根県安来市）だったが、この城は中世的な山城であったため、忠氏は適地を宍道湖畔の地に求め、城と城下町を新たに建設することとした。しかし、忠氏は着工前に若死にし、その子の忠晴はわずか六歳であったため、吉晴が国政を輔佐することとなった。吉晴は当時「堀尾普請」と評されたほどの土木巧者で、数々の土木普請をこなしていたのである。

現在も国の重要文化財として威容を誇る松江城は「千鳥城」とも呼ばれ、安土・桃山時代の様式を伝える貴重な

遺構となっている。当時は徳川氏の優勢が圧倒的になったとはいえず、天下の形勢が確立したわけではなかったため、松江城は実戦的な城郭として築かれていた。ちなみに、吉晴は城が完成間近の慶長十六（一六一一）年に病没、その後忠晴も子のないまま没したので堀尾氏は断絶となった。堀尾氏の後には京極氏が入部したものの一代のみで断絶し、その後には家康の孫である松平直政が松江藩主となり、その松平氏の治政が幕末まで続いた。

松江の地に親藩大名を配置したのは、長州藩の毛利氏をはじめ、広島浅野氏や岡山・鳥取の池田氏など、周囲の外様大名にらみを利用する意味が大きかったとされている。なおこの際、隠岐国は幕府からの預かり地として松江藩が治めることとなった。

松江藩の藩政改革

松江藩は直政が入部した当初から財政的に厳しい状態であったが、一八世紀を包んでいる文化の香りの高さは、治郷の影響によるところが大きく、今でも茶の湯文化において「不昧公好み」という言葉が残されている。

幕末、異国船の接近が頻繁に起こり、尊王攘夷運動が活発化する中、松江藩では文久二（一八六二）年にイギリス製の鉄艦とアメリカ製の木艦を購入している。この時期、他藩にも例が少なかった大型軍艦の購入には、御立派の改革による収益増大が貢献した。また、兵制を改め、翌年には西洋式銃隊の演習と大砲の試射、練兵場の設置などを行っている。

いつの時代にも、繁栄する地域は競争力のある産業に支えられ、文化なども隆盛を誇る。その典型の一つが治郷の時代の松江藩であると言える。



松江城の近くに開館した松江歴史館

監修・乾 隆明（松江市文化財保護審議会委員）

中頃、宗衍の代に至ってその窮迫は極みに達した。宗衍は父の早世によって三歳で藩主となったが、十七歳で初めてお国入りする際にはその費用にも差し支えるほどであった。そのため藩政改革の必要性を痛感し、従来の家老仕置役制を改め、「御直捌」と言われる藩主親政を行った。

宗衍の改革は、家老政治を廃し、新官僚を配置して「趣向方」とし、新たな発想やアイデアによる打開策を立てるなど、藩政史上画期的なものだった。その改革は①急ぎ資金を調達する趣向、②将来にわたる財政基礎拡大策のための新財源づくりの趣向、③家中の結束を図る趣向の三本を柱とし、藩営金融機関である「泉府方」と豪農・豪商からの見返りを付けた年貢先払いの「義田方」で資金を調達し、さらに藩営事業によって収益を拡大するというものであった。特に領民に対して山および川堤にハゼを植えさせてその栽培を奨励し、収穫したハゼの実を藩が買い上げてロウ、ロウソクの生産・販売を専売事業として行った「木実方」の事業は、幕末有事に備えた軍艦購入の際に大いに役立ったという。

しかし、これらの改革は事業の行き詰まりや藩士の不満の高まりなどで直接的な効果をもたらすことはあまりな

いまま、財政難を根本的に解消することはできなかった。結局、宗衍は改革六年目にして御直捌を切り上げ、従来通りの仕置役制に戻したのである。

不昧公・治郷の改革と 幕末の松江藩

宗衍の後を継いだのが息子の治郷である。隠居後の号である不昧の名で一般的には知られている。

治郷の治政では家老の朝日丹波茂保（のちに郷保）を中心に「御立派の改革」を行い、財政再建に取り組んだ。この改革では佐陀川の開削などの治水・砂防工事や、ニンジンの生産、木蠟・紙の製造などの殖産興業等が実施された。

なお、治郷自身は藩政の改革者というよりはむしろ茶人大名・不昧公として高名である。治郷は若くして茶の湯を好み、名物茶器の収集を行い、さらに茶道具の研究成果を著し、不昧流茶道の祖となった。それだけでなく、出雲地方においては地元の工芸技術の振興に大きく貢献し、茶道を通じた芸術文化発展の基礎を築いた。

今もなお松江のまち



松江藩主松平家の菩提寺である月照寺(げっしょうじ)の大竜

若桜鉄道若桜線

《鳥取県八頭町・若桜町》

地元の人たちの熱意で存続し、第三セクターとして運行している若桜鉄道。駅では手作りの案山子が乗客を迎え、周辺住民のイベントも開催されるなど、地元の人たちの温かい心が伝わってくる路線である。

地元の熱意で

第三セクターとして存続

鳥取県のJR因美線郡家駅を出発した一両編成のディーゼル車は、まるで田園風景を楽しむかのようにゆっくりと東に向かう。途中駅のホームには地元

の人たちが作った案山子が並び、笑顔で乗客を迎えてくれる。車窓に広がる風景といい、ホームの案山子といい、心がほのぼのとする列車の旅である。

この路線が、鳥取県東部の八頭町と若桜町を結ぶ若桜鉄道若桜線である。その距離は一九・二キロメートル、所要

時間は約三十分である。

若桜線が全線開業したのは一九三〇（昭和五）年であるが、鉄道敷設の動きが本格化したのは開業の十年前である。鳥取県と兵庫県を結ぶ鉄道を敷設して、関西への時間を短縮しようとしたのだ。折しも一九二二（大正十一）年には改正鉄道敷設法が制定され、「鳥取県郡家ヨリ若桜ヲ経テ兵庫県八鹿附近ニ至ル鉄道」も予定鉄道路線となった。そして、翌年から敷設工事が始まったが、戦争の激化に伴って若桜駅から兵庫県に向かう区間工事は中断され、そのまま戦後を迎えた。

戦後は日本国有鉄道へ移管されたが、利用者数の減少などにより一九八一（昭和五十六）年には廃線が決定した。しかし、地元の人たちにとって若桜線は重要な交通手段で、特に雪が降り積もる冬にはなくてはならないものとなっていた。

そのため、廃線決定の数年前には継線だけでなく地域も活性化していきたくて考えています。こう語るのは若桜鉄道株式会社の原卓也社長である。駅を元気にするために、それぞれの駅では軽トラク市や桜まつり、鬼っ子祭りなどのイベントが開催され、若桜鉄道も地元の一員として積極的に参画している。

そうしたイベントを代表するのが毎年八月八日に隼駅で開催される「隼まつり」だ。これは、輸出用バイク「隼」のライダーが、同一名であることから聖地として全国から隼駅に集結するもので、その数は六百台にも上っている。地元の人たちは、北海道や鹿児島から

続運行の協議会を結成し、地元を挙げて乗車運動を展開した。こうした運動をベースに一九八六（昭和六十一）年には第三セクター鉄道への転換を決定し、翌年の十月十四日（鉄道記念日）にJR西日本若桜線を引き継いで若桜鉄道若桜線が開業した。

若桜鉄道若桜線の駅はJR西日本内の郡家駅を除くと八駅であるが、そのうち五駅には地元住民が自主的に結成した「駅を守る会」や「駅を元気にする会」などがあり、案山子の設置や花の植栽、駅の清掃といった活動を継続的に行っている。

駅を元気にするイベントも開催

「そうした活動を支えているのは、若桜線を存続していこうという住民の思いです。沿線人口は減少しており、経営は非常に厳しいままです。しかし、こうした地元の人たちと一緒にあって、路

観光名所にも恵まれた若桜線

緑の山々に抱かれた若桜線であるが、観光名所も多い。必見は若桜駅構内である。ここには転車台や給水塔など開業当時の設備が良好な状態で残っており、二〇〇八（平成二十）年には国の登録有形文化財に登録された。

また、八頭町の八東ふるりの森や船岡竹林公園ではアウトドアを満喫できるし、若桜町のわかさ氷ノ山ではキャンプやスキーなどが楽しめる。さらに、若桜町では風情ある若桜宿を散策するのもお勧めだ。

ほのぼのとした若桜線は、訪れる人の心もほのぼのとしてくれる。



山間を走る一両編成のディーゼル車 写真提供:若桜鉄道



作図:小学館クリエイティブ



国の登録有形文化財となっている若桜駅構内



隼駅に集まったライダーたち 写真提供:八頭町



手作りの案山子が乗客を迎えてくれる若桜線の駅

岡山県立博物館が所蔵する大鎧で、かつて備中国赤木家に伝来したものである。源氏と平氏が覇権をかけて戦っていた平安時代末期に武将が実際に着用していたとみられる。

赤韋威鎧は鉄や革の小札（三行の小孔が開けられた小さな板）を茜染の革で綴った大鎧のことである。この赤韋威鎧は胴高四六センチ、草摺（腰の位置に付ける防具）長二七センチ、兜鉢高一二・三センチで、鎧と兜を合わせた重量は約二五キログラムもある。実用性の高い、豪壮な趣を有する大鎧だ。

国宝に指定されている平安時代の大鎧の多くは神前に奉納されたもので、近世以降に大規模な補修を受けている。しかし、この大鎧は、胴や草摺に幅広・大型の黒漆塗三ツ目札を用いている点、草摺を前後四段、左右五段下がりとし、前の裾を分割しない点など、平安時代末期の姿を維持しており、大鎧の遺例として非常に価値が高い。



豪壮な趣を有する大鎧の前面



後面

写真提供：岡山県立博物館